

卷四
三六

出服下さうさうあ也

一日野原三条及一吳揚まのり伊勢若原子出使
沖見と各ありて出立海のりてをられ

一沖精進内日必松梅院精進を内出却り三谷を寺

一日地をより今日出越杖二玉二金よりのあり

一沖精進の阿くる日ハ大名沖供元より義物
出を色上

古年中定例記以伊勢貞春本校合畢

公方様正月沖更始之記

目録

- 一 正月二日沖祭為始之事
- 一 正月四日沖謡始之事
- 一 正月七日沖吉書始之事
- 一 十日沖糸内始之事
- 一 十日沖作多始極神之事
- 一 沖尊結始極神之事
- 一 十一日患檢校祇儀之事
- 一 十一日沖所々何毛出糸三献糸極神之事

卷四
三六

- 一十四日 公方様松久やし乃事
- 一十七日 御的始之事
- 一十九日 八幡宮へ御代糸之事
- 一二月朔日 後島山御移進上之事
- 一旅 公方様御憑之事
- 一十月 乃このり
- 一御成之時 進物之事
- 一正月 朔日 大若出仕之事
- 一旅 殿中一献之時 之りけり事
- 一御寺へ 御成御焼香之事

- 一刃 紙人又き公事
- 一献之時 八光折を仕事
- 一乃 乃紙けりて人乃給侍之事
- 一酒乃 御乱酒に成く各音曲之事
- 一白上り 又各心之事
- 一主人 責人乃御使之事
- 一下 緒之事
- 一金 禰後子以下進上之事
- 一寺家 御成之時 為仕之事
- 一主人 貴人のあをる時之事

春日部

一 心まゝの事

一 永正十八年七月五日三条御所止常徳始由る始

一 永正十八年三月七日大内義興彼相約案之

一 大永元年六月廿八日細川高國彼任管領事

一 能路次三管領其外人上達事

一 又子三人之供を馬あゝ仕事

一 志よりぬい扱處之事

一 正徳元年八月廿一日

一 正徳元年八月廿一日

一 正徳元年八月廿一日

一 正月二日御案馬始 手廻腰帶并御沓保勢守を
上之御沓ハ保勢駿河守任之仕御案并御沓
勢守并同苗大畧然役者紙張仕小笠原民約頼
系勤之毎年計分也

一 正月四日由ら〜始親世大吏同口高左衛門被紙張
後右系大吏進上之由麻に清織物と由股と被相
副ハて名下山岡之高左衛門二人由織物と由股と由
由也河太吏と由後〜由 保勢与由麻を太吏と由
同由股を左の由〜由 持先由麻を太吏と由
〜と渡り御大吏治行〜由 記中や〜由

中山に後には尾形門又は小袖巻に是は古服なり
ありと音曲紙を品中の例奉り此分りて也

一同七日御吉書始也右系大吏へ被せ御書に御使
白伴守系北別と右系太刀を伴職貞宗と出之
駿河守を品出御吉書入に御文箱と秋庭備中
与持出渡しを駿河守出向給之同伴務より後系北太
刀と出御吉書守次の間より貞雅又渡之御文箱と
右系持月太子と右系持々々出系北之級之伴勢
多被菅人又是之級之け分仕奉り別系北沙礼
江紙俵有之次伴勢守支度より打系北同前也

一 御吉書之御文言之事

改年言也不可有際限程切面也

正月七日

御判

右系大吏とのへ

一 十日御奉用始也此流以下例年伴勢守由供
一 十一日御化奉始之之相辨八出大工以下何も紙俵仕
始也
一 從富山尾張守被爰人六人出之とあるにけり

ことゆへに袖を以て持沙敷く正座に坐す時先沙庭
 又並に坐す一人して九度也仍其度くるり袖の上
 袖口に印を以て總仕りしんよらめころころ年
 少くけの袖のおとめ帯取ていのほりてひるころ
 おもむくころいなくも也さくは庭の者お二人
 先かてるあつをひらけてもちてとあをいり
 けをさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 ち又念をさくさくさくさくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

のは掛いりもよくい仕てさくさくさくさくさく
 さく九本は作儀式は仕の由大工乃支度かくむ
 べきをさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 人ハけ支度也け外ハ急用と下りての別又
 由大工又河馬紙紙下之沖作るも許作際加
 加突書結城七帛祇儀沖太刀をハ加賀守由大工
 又巻之例年け分也作勢守并同苗尻仍も祇儀
 一同十日惣檢校被祇候於沖前平家中之四
 沖小袖をさくさくさくハ其目乃中次紙後之又平
 家之付ハ人許り沖紙之巻也沖前ハ座

其のものを引くに儀候也

一同十日湯所へ柳屋毛布系三献系に為仕ハ女房
一危手長ハ侍危侍勢与一同侍勢六郎大妻侍勢
又七侍勢又次高之

一月十四日於 公方様まのち申すに度候
一 湯屋棟出小袖と十親世太夫又又出下出ひろき
又九入のて出母持候候し御座候の申入
小笠原乃らしく湯屋棟乃上にめされ申唐より
の出小袖を出母候うせ申申にて出常たれ申せ九
乃出少く乃上よと申せて出下候勢守に候申候

これら儀清死中位前を有之親世太夫又又
太夫持候位仕十乃出少く又て松布候位候
を御目候出小袖を出ひろく又入出候
人乃其存候又出出小袖候候候下出之
奉り出母とハ侍勢守の妻の候申候候ハ侍
勢守とハ

一十七日湯的始 小笠原氏於出補同六郎系勅
侍家苗氏畠山苗氏以系勅と方有之討子ハ
毎々替り

一 御的候儀式同候候候も相替り候候候

一子ゆ也

一十九日八幡宮へ為代官出仕死に次の間又一人系
詣の八幡守の由趣い系り紙 公方様御頂戴由趣
い乃役人の係勢駿河守勤之先くハハハハハハハハハハ
今ハことあふのり也

一正月より儀式ハけ分也

一二月朔日辰島山御指進上之由指進する由者ハ
白鳥一巻のしあまい千本也天野将兵衛二月
朔日又七月朔日十二月朔日年中に三度度進上ハ
由者汗を由目ハ二種あり一人ハてくもてて

一人ハ島山苗氏そん又一人ハ伊勢苗氏加らるも
又あ人喜又島山苗氏に仕儀も也又河内國
乱の中尉ハ系教りて柳指進上ハ後も我亦
島山より次ハ仕儀系能存也

一け酒を仕仕人ハ多ハ管領以下ハ不沉醉ハ
て退仕也

一於公方様御憑之奉仕勢守并同苗氏勤之
七月廿七八日之間又係勢守御付泊して是日由

奉行

伴勢守

右筆

伴勢周膳守

伴勢右亮

御使

伴勢与一

伴勢六郎左衛門

木河原

古河原

田原

李阿弥

葉阿弥

森阿弥

付書くに又同朋虎を注して是處
同々先ハ役者たり

一十月廿のこのは成切之書 公方様は此より先下

方ハ此より先下又此處に不致下方ハ此所より此

成切之書ハ此ありとて是方より先下

一措つて之書ハ此出之之書ハ月杪未ありは紙捲

積取之書子母らありといふ也又此所ハ又書此所ハ

公人書此紙捲仕りて積取り是も各々願敷

也中之也毎年計分りては此成切也又此處至

共中地

一御成之付進物より先至殿りて式三献系方付

一族出入り方ハ此所征矢多持して此處より先下

鞆並馬をよと是も一族を引りて是所は月杪也

川之亭至此所ハ二月の此處まで此所亭至白

其力を進上のに後水會の湯成しては香糸の
河初献又又湯馬太刀のては進上の此後ハ献
りもを上の但還沛するんやありさうにハ
献りも進上の河臣より進

一正月朔日大名出仕管領より湯馬太刀を献上
ハ山名後正月十日又進上斗
一控敏中一献乃時湯馬(と)つりけを彼出
して上下を出入は信流の月一人出さるハ
進上ハかろけ後りものては湯馬ハ進上
進上ハならやうにて中ハたれたむら

一湯りに仕る非新後ハ湯馬ハ乃是ハ信
の古酒ハ地比又ありハ信流乃らハ人
出さるハ公方ハ由らハハハハハハハ
た只ハあハハハハハハハハハハハハハ
の儀もハハハハハハハハハハハハハハ
またのハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
一由寺ハ湯成の由せう香の番合ハハハハ
中ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
一乃ハ人ハハハハハハハハハハハハハハ

一 しく懐中仕りてさうくして出口袋中にしき事
不可多之

一 献乃付ハ先折を出入る後うりけそのとあ出
け後くさやうりめさるくも又おさうりのと

一 未つこお出り又食器ハ美人乃出前ハ不出
心あふ地のるりよと也

一 うりさとびつるて人の殆ど付とくさして
りりぬるりりらんぬいある半山くくもれ
りりあしくたこれらり也

一 酒の付乱酒又成りて各音曲のるりあふ後ハ

酌同くりさるさうさうり有るもさう

一 けさうさうりあふりて是但美人美人の作
又付さうさうさうり

一 けさうさうりあふりては只一礼して系
らう能る如常礼をり系しあくも又系は付ハ

一 只さ地さうり足りて系さうさうり左右を足り系
りりり不あ後ハ只紙作乃付ハ清礼不中ハ又退

一 此礼何らうわまふ人乃前りてハ長成つさて
此礼ハさうさうりあくもさうり也

一 五人美人乃為使同名も我ら下らる方来ハ

大いづもいはいんきん又梅り懸くのみことより同
名氣うらハ程うやまひ中人くんとらり礼もぶく
とて仕らるり

一卜緒乃中主人ありえけらるるをば主門の者ハ
こも斟酌ハ又紅乃ありハけ扱も不及も雅ももひ
り也

一令彌波子以下進上り時より一振乃より唐唐
のまゝこの然も但つて炎うら子ハ海ハ引合つま
てつてて也常水引りてく結もく度よ中人ハ又
紙のよとく中海ハ只このまゝ中人ハ折小入り

ゆめのよに墨も事ハも地儀也

一寺家ハ清成又ハも人ホ出入海ハ宮住をハ唱
食侍者乃るせりハ信氣ありハ如いて言仕り
ハる地義りて也

一貴人主人乃前と証を海ハも方の子をけらて
ゆふと海ハくハ又出あ出入口中と通海ハ
あのもをつて通てり也

一いさうらん乃りハもをつらてそめらるるをわ
うりんハもはらん珠ハもくハ只ハ二ハを
つて也ハもりハ也

一永正十六年七月五日下京三条御所法華傳始
此事始

一法華傳始辰刻細川右京大夫高圓勤之被管人安業
師寺所出也

一此事始辰刻同日惣寺山修理寺同小寺仍
一併燒右京亮下野守結城七郎

一右筆方松田丹後守祿友英法守祿友上野成同
一併普法寺山金山三郎

一此事始由夜之番近一沙太刀御馬下之捨大工
同前塗大工同前如合沙太刀三振御馬三足沙太刀

八併燒右京亮渡之也

一惣寺山以下并併燒寺貞陸着在皮也此以後

沙太刀各進上之次月右京大夫畠山修理大夫大

因左京大夫以下非常惣寺山以下非常傳始也

一併始之此礼在太刀二振在之南一八物太刀也

惣寺山以下八合寺同朋八合お後りく此礼中

一惣寺山太刀以希仁畠山修理寺初之先役人

一為又沙太刀進上之也

一永正十一年三月七日就大因義真被お約公貞久弘

中越後守而(貞陸為使孫越也通り中米

一三藏乃因者 沛成中半武坊之八甲斐一人也
一同織田も沛成中も由常仁院中之更何乃沛
代よりつるも云院授之也

一高山よりハ拖依志^{推名}為神保谷田沛成中とい
へども是又何乃沛代よりつるも云之也卷四
紀伊個々郡代を物する所 公方様熊野内系諸
所所諸君も此宿城中も此を沛成中もつるも
歎是ハ一向各別之事也

一細川内も一人毛之之山名内又垣屋沛成
成中も是も五院院也け分院又内返中も後

此の事も熱別大石乃内同仁者も 公方様へ書く物
を之も位より昔ハ甘之也又書物院も毛色
上位者ありてハ之之ハ當時も又之ハ進上り
之謂也大石也沛成彼中何ハ内者内礼中
よりハ常如儀也是各別ありけ昔院又貞隆
中も也

一 大永元年十月九日細川右京左衛門尉彼位
宗信領職沙使由度伴舞も貞忠系飛(系中)
初度ハ彼位も首領位出内使也二度月ハ内法内
表取も首領使也け後右京左衛門被祇儀内三益

系惣別ハケケ度ニ出仕ル旨沙礼沙礼太刀持曰
 沙礼沙礼御使任携与裏打管領出仕同裏
 亦右系大支出仕供元香川英作与裏打太刀持
 秋庭備中守本記長垣又曰帝ニ上リ
 一各系兆へ礼又系令を進ム

一公方様ハ系兆同名元斗内太刀持也

一於路次ニ管領ノ外々人へあひりる事あり
 其人ト云フ中ノ人別ニ白クテ然ル事也
 一これ中ノ事ハ振神ノ事ニ付ハハ時宜キ借
 費也

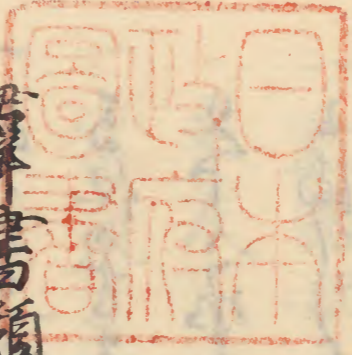
一父子主人の供を馬リて仕ル事あり自然親為
 事仕ル事子乃身ノハハかりし事也但又主人お
 りて承りし事ハ下ニ仕ル事也又承りし事
 一志々のめい披露の事振神ハ大方の意ニ香炉曰
 らいさ燭燭又らふ事也
 めいをも意に事ハ薩涼新被渡ハ清ル事
 前ハ持系中ノ志々乃めいニ公方様此実名を以
 持々ニ出仕時給りて薩涼新被渡中ノ香爐
 の火をハ殿中ニ移れり

卷四百七

小姓也

右所奉始記以伊勢貞春本校合

羣書類從卷第四百七



修
昭
和
年
月
日
内
閣
文
庫

